

創作表現専攻 ゼミ選択ガイダンス資料

ガイダンス進行次第

はじめに～ガイダンスにあたって～（専攻主任）※動画①を視聴

※以下 1～4：動画②を視聴

1. ゼミおよびゼミ選択の概略（教務委員）
2. 選択の方法および日程について（教務委員）
3. 複数ゼミ登録制度について（教務委員）
4. 各ゼミの紹介

- ① 清水良典ゼミ
- ② 柳井貴士ゼミ
- ③ 永井聖剛ゼミ
- ④ 酒井晶代ゼミ
- ⑤ 藤井誠二ゼミ
- ⑥ 劉永昇ゼミ
- ⑦ 角田達朗ゼミ
- ⑧ 刈馬カオスゼミ
- ⑨ 小倉史ゼミ
- ⑩ 吉田朝香ゼミ
- ⑪ 志水瞳ゼミ

1. ゼミおよびゼミ選択の概略

(1) 演習Ⅰ～Ⅲ（ゼミ）について

「演習Ⅰ」（2年後期）、「演習Ⅱa・Ⅱb」（3年前・後期）、「演習Ⅲa・Ⅲb」（4年前・後期）は、創作表現専攻応用科目の根幹に位置づけられ、「卒業プロジェクト」とも連動する重要な科目である。「Ⅰ」から「Ⅲb」までがひとつの連続したプログラムとなっており、徐々に専門性を高めてゆくことになるので、2年半のあいだ同一ゼミで履修することを原則とする*。学生諸君は、自身の希望と適性をよく考慮して選択することが必要である。

*やむを得ない事情と判断された場合は、所属ゼミ変更の申し出に応じる場合もある。アドバイザーもしくは教務委員に相談すること。

(2) 卒業プロジェクトについて

創作表現専攻の発展科目「卒業プロジェクト」の単位(4単位・通年科目)は、各ゼミで指導を受けながら仕上げる卒業制作・卒業論文などの成果物に対して与えられる。創作表現専攻所属の学生は、4年ゼミとあわせて必ず履修すること（4年前期履修登録時に「演習Ⅲa」とあわせて登録する）。

2. 選択の方法および日程について

(1)ゼミ選択上の注意事項

- ① 各ゼミは**定員 15 名を原則**とする。ただし、状況や事情に応じて定員調整を行うこともある。
- ② 所属ゼミは提出された希望に基づいて決定するが、**希望のゼミが定員を超えた場合には、選考を実施する**。詳しい日程は、下記「ゼミ決定までの日程」およびキャンパススクエア・学部ホームページにて配信される情報を随時参照のこと。
- ③ このガイダンス資料に載せる紹介文はあくまで概要である。質問や相談のある場合は各担当者または教務委員にメールで尋ねること。

教務委員メールアドレス: fumiog@asu.aasa.ac.jp (小倉) / nagaiki@asu.aasa.aac.jp (永井)

ビデオチャットを希望する場合→7月7日～7月16日のお昼休み(12:45～13:20)に受付

希望する日時(できれば複数)と相談内容を事前に上記

教務委員宛てにメールで送り、予約をすること。

※ 以下の結果発表や調整に関する連絡は、すべて CampusSquare・学部 HP にて行う

① 7月20日(月) 15:00 ゼミ希望調査用紙 送信〆切

※Microsoft Forms の指定のリンクからアンケートフォームに飛び、回答を送信すること

② 7月22日(水)頃までに ゼミ別希望者数集計結果(一次)の発表

※ この時、定員超過したゼミの選考方法や今後の日程についての連絡もおこなう。

③ 定員内に収まったゼミに希望を提出した学生は、この時点で所属ゼミ決定。

④ 8月上旬(予定) 第2回ゼミ希望調査用紙 送信〆切

*希望が特定のゼミだけに極端に偏るなど、想定外の事態が生じた場合は、やむをえず日程や方法を変更する場合がある。

3. 複数ゼミ登録制度について

この制度は、意欲的な学生の学修機会の拡大と、一層の学修意欲の向上をねらいとして設けられたプログラムである。

たとえば、Aゼミに所属しながら（これを「主ゼミ」と呼ぶ）、Bゼミにも所属して（これを「副ゼミ」と呼ぶ）、主ゼミと副ゼミの双方の領域を学修しながら、領域横断的かつ総合的な力を身につけつつ、その成果を「卒業プロジェクト」に結びつけることを目指す制度である。ゼミの組み合わせとしては、以下のような例が想定される。

- ・異なる領域の複数の創作系ゼミに所属して、メディアミックスもしくはクロスカルチャー要素の高い創作物を製作することを目指す。
- ・同じ領域の複数のゼミに所属して、学修機会を増やし、複数の先生から専門性の高い指導を受ける。
- ・創作系ゼミに所属する学生がリサーチ系のゼミにも所属して、たしかな理論や調査に裏づけられた創作物を製作することを目指す。

ゼミの複数受講はそれ相応の負担を伴うものであり、安易な利用は好ましくないが、意欲的で問題意識の高い学生が、この制度を使って視野を広げ、専門領域の理解をさらに深めることを期待したい。

この制度を利用できるのは、以下の条件が揃った場合のみである。

- ① ゼミ担当者が「副ゼミ」の受け入れを認めていること（各担当教員のゼミ紹介ページ参照）
- ② 「副ゼミ」が定員を満たしていないこと
- ③ 2年後期から4年後期まで継続して学修する意欲が認められること（希望学生には面接を実施する予定）
- ④ 2年前期までの履修済み単位が50単位以下でないこと。1年次のGPAが1.5以下でないこと。

なお、複数のゼミに所属する学生は、4年前期の履修登録をする際に、所属するゼミの中から「卒業プロジェクト」に取り組むゼミを選択する。その際には、所属するゼミ担当の先生と十分に相談した上で選択をすることが肝要である。

複数ゼミ登録までの流れ

- (1) ゼミ希望調査用紙を提出する（7/20 締切）
希望するゼミが定員内に収まっていれば、この時点で「主ゼミ」は決定。
定員を超えたゼミは選考を実施
- (2) ゼミ所属学生一覧の掲示（8月上旬、掲示板・Campus Square・学部HPにて）
このとき同時に、複数ゼミの登録を希望する学生向けの告知もおこなう
- (3) 「副ゼミ」希望調査用紙の提出（8月末まで）
希望する学生は、定員を満たしていないゼミから「副ゼミ」を選ぶ

各担当教員からのゼミ紹介と自己紹介

目 次

清水良典ゼミ	4
柳井貴士ゼミ	6
永井聖剛ゼミ	8
酒井晶代ゼミ	10
藤井誠二ゼミ	12
劉 永 昇 ゼ ミ	14
角田達朗ゼミ	16
刈馬カオスゼミ	18
小 倉 史 ゼ ミ	20
吉田朝香ゼミ	22
志水瞳ゼミ	24

〔プロフィール〕

1954 年奈良県生まれ。立命館大学文学部卒。文芸評論家。

愛知県立高校教員時代に、同僚たちと創造的文章表現のための「表現」授業を共同討議により実践。この同僚との共著に『高校生のための文章読本』『新作文宣言』などがある。1986 年群像新人文学賞評論部門、93 年名古屋市芸術賞奨励賞、2010 年愛知県芸術賞、2012 年中日文化賞を受賞。著書に『虚構の天体 谷崎潤一郎』『文学がどうした!』『最後の文芸時評』『笹野頼子 虚構の戦士』『村上春樹はくせになる』『2週間で小説を書く!』『MURAKAMI 龍と春樹の時代』『文学の未来』『あらゆる小説は模倣である。』『書きたいのに書けない人のための文章教室』『デビュー小説論』など。

〔ゼミのコンセプト(演習の目標、学生に期待すること等)〕

小説はだれにでも書けます。一冊の本も読んでいなくても書けます。しかし、それが読むにたえる小説かどうかは別です。一冊の小説を読むのには何時間、いや何日もの時間がかかります。それだけの時間を人生から奪われるのに値する小説を、できれば読みたい。それが読者の気持ちです。書きたい側の身勝手な野心や願望だけではなく、読者を想像力に含んで書かなければなりません。硬く言い換えると、「他者」に届く小説を書くこと——。それが小説を書く者が持つべき目標であり、同時にこのゼミの目標です。

〔授業内容〕

授業は2年生後期では現代文学から代表的な作品を何作か選び、じっくり読んで検討することを通して、現代小説の多様さや方法意識を学びます。その際も一作は創作してもらいますが、本格的に書き始めるのは3年からです。作品が提出されると、ゼミ生全員で合評を行います。一つの作品に20分ほどかけて、ほぼ全員の批評を聞きます。この批評に何度も晒される体験が、「読者＝他者」の体験となって蓄積されるはずです。創作の提出は半期に二度ほどです。

4年生になると、卒業制作を視野に入れた作品作りがメインとなります。卒業制作で提出された作品は、公募されている各種の新人賞からどれかを選んで応募してもらう方針です。どのようなジャンルの小説を書くのか、各自で具体的な照準を定めるためです。

なお例年、夏季休暇中に3・4年生合同で合宿をおこなってきましたが、今年は中止、来年もどうなるかわかりません。

〔自己紹介〕

学生時代から小説を書いてきて作家になることを夢見ていたのに、評論にも興味が出てきて、小説部門と評論部門がある群像新人文学賞に両方応募したところ評論部門を受賞してしまい、それ以来「文芸評論家」と呼ばれる仕事を30年以上続けています。しかし小説も細々と書きつづけていて「群像」に発表したこともあります。4年前から浜松在住の作家、吉田知子さんの同人誌「バル」に所属しています。

現在、中日新聞で本の紹介コラム「読書かいわい」を、朝日新聞で東海地区の出版物の紹介をする「東海の文芸」を、それぞれ定期的に連載中です。そのほか日経、共同通信、週刊朝日、週刊現代、各社文芸雑誌で書評を執筆しています。また「日経小説大賞」「小島信夫文学賞」「尾崎士郎賞」などで選考にかかわっています。

もともと谷崎潤一郎論を書いて新人賞を受賞したので、今も谷崎文学には興味があります。また村上春樹に関して二冊の著書があるので、彼の新作が話題になったときや、毎年ノーベル文学賞が話題になる頃には、よく新聞や雑誌からインタビューや寄稿を頼まれます。

文学以外に、学生時代から続けていることは音楽です。アコギとエレキを合わせてギターを19本所有し、主にブルース系を弾いています。研究室にもギブソンが2本置いてあります。かつては年に数度のライブをおこないましたが、目下は休眠中。いっしょに演奏したい人がいたら声をかけてください。聴くほうではブルースとロック全般、ジャズを聴きますが、特にクラシックが好きです。モーツァルト、ブラームス、シューマン、ブルックナー、マーラーを愛好します。歳をとるにつれて室内楽が好きになってきました。

〔定員を超過した場合の選考方法〕

4,000字程度の短い作品を書いてもらい、それによってオーディションします。

〔その他、受講上の注意点など〕

とにかく小説を書くことと読むことが、ゼミの活動の中心です。そのどちらかでも苦痛な人には向きません。また書き手にとって依頼者との約束、とりわけ締め切りは重要ですから、授業でも締め切りを守ることは鉄則です。

このゼミでは小説のジャンルを差別しません。しかし中・高生時代の延長のまま、ラノベやファンタジーを「小説」と考えている人が多いのが実情です。それは意志的な選択ではなく、ただの無知と惰性でしかない。二十歳を過ぎた自分にふさわしい小説のあり方を模索し、見つけだす意志が必要です。

[プロフィール]

栃木県栃木市生まれ。茨城県立第三高等学校卒業。アルバイト。法政大学文学部日本文学科卒業。サラリーマン。早稲田大学大学院文学研究科修士課程日本語日本文学コース修了。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程日本語日本文学コース満期退学。「博士（文学）」。早稲田大学非常勤講師、法政大学沖縄文化研究所国内研究員（継続中）、国際交流基金、蘭州大学外国語学院講師（中国）を経て、現職。

中学時代、冷房完備の図書館で涼むうちに読書が好きになる。太宰治、芥川龍之介、谷崎潤一郎、江戸川乱歩を読み、なんとなく文学部に行きたいと思う。文学部進学後は、カルチュラルスタディーズを知り、趣味の映画、漫画、アニメを交えた文学研究を模索。8ミリ映画サークルの部長をつとめ、短編映画を5本作る。万人の理解を得られず。そこで映像を言葉にして小説を執筆、集英社の新人賞へ応募、最終選考に残るも、選考委員3人の理解を得られず。教育系企業で働くも、理想と現実のギャップに悩んだ、わけでもなく、とりあえず退社後、大学院進学。教員免許を取得して辞めるつもりが、沖縄の文学、文化に魅了され、研究の道へ。沖縄をめぐる近代、現代の文学作品、映画論を発表、継続中。

[ゼミのコンセプト(演習の目標、学生に期待すること等)]

文学作品は読まれてこそ存在を許されます。読むことで、作品は命をつなぐのです。その評価を与えるのはときに権威的な視点かもしれません。例えば、明治時代の文学史を見てみましょう。坪内逍遙、森鷗外、夏目漱石…。大正時代の文学史を見てみましょう。芥川龍之介、谷崎潤一郎…。昭和時代の文学史を見てみましょう。太宰治、中島敦、大岡昇平、松本清張…。あるいは平成時代の村上龍、村上春樹。あれ、女性はどこへいった？ 沖縄はどこにある？ 私たちは往々にして権威を内在化して、自明視してしまいます。規範化された文学史にはあるコードが働きます。「国民文学」「伝統的文学」「日本文学」…。沖縄の島を、街を歩いて知るのには、琉歌のリズム(8886)、エイサーの掛け声。沖縄からは4人の芥川賞作家(大城立裕、東峰夫、又吉栄喜、目取真俊)が誕生し、また素晴らしい女性の作家がいます(久志富佐子、吉田スエ子、崎山多美…)。映画監督では、高嶺剛や仲村颯悟がいます。付け加えるなら、明治、大正、昭和初期の「文壇」という権威の前には、沖縄の作家は太刀打ちできませんでした。山城正忠、池宮城積宝、末吉安持…。彼らの作品に描かれるのは日本とは違う「日本」。自明性を問い、権威を疑う作品の数々。世界を相対的にとらえる視点。まず、皆さんに持ってほしいのが、この視点です。そして「読む」行為を通して、作品の命をつなぎ、新たな発見をどんどんしてほしいのです。そのため、まず基本になるのは「読む」または「見る」行為を通して「知る」こと、それに資料を加えて「考える」こと、そして「書く」ことへと昇華してほしいと思います。課題となる作品(小説、映画など)はときに容易に解釈可能と思えるかもしれませんが、しかし、「読み」の方法は多彩に開かれています。そこで、「読む」ための方法、批評の手つきを、本ゼミで学ぶことで、多様な「読み」の回路を開き、自らの執筆(創作)へ還元してやる、という思いを持った諸君を、お待ちしております。

[授業内容]

2年後期は、様々な文学作品を読んでいきます。読みの行為を通して、批評の方法を知

っていく、また批評に対する文学作品との在り様を考察していきます。必要に応じて、映像作品を参照し、創作表現することの核を見出していきます。

3年前期は、文学批評、研究や創作を念頭に置いて、文学作品を中心に講読します。作家はなぜその作品を書いたのか、その作品には何が潜んでいるのか。社会学的に作品を「読む」ことを学びながら、一方で表現の方法にも目を向けて読解します。そこからあなたの、モノを書くことへの自覚、意気込みを成長させ、小説創作に挑戦して欲しいのです。

夏休みにはゼミ生の希望により合宿を行います。沖縄、離島、外国?? このときばかりは「書を捨てて、見て聞いて学ぶ」ことを実践します。「人」や「風景」との関係、教室では学べない「場」を取り入れ、どんどん燃えていきましょう。

3年生後期以降は、文学批評、研究を学びながら、実践力としていかすため、創作合評を数多く行っていきます。

4年次には、小説創作、文学研究の分野で卒業プロジェクトに取り組みます。可能な限り、生きたテキストとしての作家や研究者の話を聞ける場も設けるので、刺激を受けて、卒業プロジェクトに臨んでほしいと思います。大学生としての時間を、充実したものにしていきたいです。

[自己紹介]

日本の近現代文学、特に沖縄の近現代文学や文化、映像などが研究対象。

中学時代は野球三昧、全国大会準優勝。高校は地元の県立高校でのんびり野球。基本は体育会系。中学時代、暑い夏、避暑のため図書館で涼むうちに読書を開始。太宰治がすごいと思すぎて全集読破、やがて嫌いに。その嫌いな理由を言語化するために批評と出会う。村上春樹と村上龍を読んで創作にも興味深々。アウトドアが好きだが、内にこもるとしばらく外へは出ない。大学進学後、文学研究とともに映画研究の方法を知り魅了される。小学校から阿呆のように見続けた映画は年間、200本。大学では8ミリ映画サークル部長を務め、そこら辺のインディーズ映画を見まくる。阿呆がバカなインディーズ映画をむさぼる構図。趣味の旅行で訪れた沖縄の文化、歴史、文学、映画に魅了され、博士論文では沖縄文学を取り上げる。海外は34の国と地域を長期休暇中に電車やエアバスで巡る。いろいろ勉強になった国、ベスト3は、チェコ（ビールと文化のすばらしさにくらくら）、インド（わけあって痩せた）、北朝鮮（知らないことと知ってはいけないことがこの世の中にはある）。小さいころからビートルズと演歌を聞き育ち、大学時にはバンド活動。下手の横好き。メロコア風なアレンジと楽曲にはまりまくるが、本当はアイドルが好き。しかし、中国勤務だったため、しばらくオタ芸をうっていない。コロナ後には、オタオタしたい。

[定員を超過した場合の選考方法]

調査用紙をもとに選考します、そこで決まらない場合は課題に沿ったレポートを提出してもらいます。

[その他、受講上の注意点など]

「文学」に関する授業を受講しておく、理論や読み方の勉強になるのでお勧めです。また文芸批評に関する授業なども積極的に受講しておく、と本ゼミに入りやすいでしょう。

【プロフィール】

1968 年静岡県生まれ。横浜市立大学商学部卒業後、会社員になったものの長続きせず、2年弱で辞めて横浜市立大学文理学部に学士入学。このとき出会った先生の影響で、文学研究という魅力的な仕事があることを知った。大学院は、早稲田大学大学院文学研究科修士課程に進んだ。高等学校の非常勤講師と、通信講座の小論文の添削、月刊の学会誌の編集補助のバイトをやって生計を立てながらの慌ただしい大学院生生活だったが、いくつかの読書会や研究会に参加して、このときがいままででもっとも知的な刺激に富んだ時期だったと思う。修了後は早稲田中・高等学校教諭として6年間勤務し、勤務先から目と鼻の先の早稲田大学大学院教育学研究科博士課程に通って研究も続けた。

愛知淑徳大学に来たのは 2004 年の春。文化創造学部表現文化専攻に6年間所属して、2010 年度からメディアプロデュース学部、2016 年度から創造表現学部所属。名古屋市名東区在住。

【ゼミのコンセプト(演習の目標、学生に期待すること等)】

このゼミは、プレゼミの延長線上にあるゼミだと思ってもらえればわかりやすいと思います。

プレゼミでは、明治 20 年代の泉鏡花・樋口一葉から敗戦後の三島由紀夫・大江健三郎までの時代の短篇小説を題材に、主にテキスト論という方法に拠りながら、文献調査・分析・発表資料作り・プレゼンテーション・質疑応答を経て、最後に 3,000 字程度の文章にまとめあげるまでのプロセスを体験してもらいました。ほとんどの人にとって初めての体験だったでしょうから、発表資料作りまでの苦労と教室でのプレゼンテーションとがもっとも印象に残っていると思いますが、3 年次以降のゼミでは、批評理論と現代思想に基づいたクリティカルな思考力と文章力とを鍛えることの方により多くの力を注ぎこむことにしたいと思います。具体的には、2,000 字程度のブックレビューから、10,000 字を超える学術的な文章にまで応用可能な実践的な力の修得を目標として掲げます。ゼミでの学修成果を反映させた小説創作も歓迎します。なお、プレゼミではテキストの都合で近現代文学作品のみを考察対象としましたが、ゼミでは、文学テキストのみならず、言語メディア以外も含めた他ジャンルのテキスト、さまざまな文化事象・文化装置などまで考察対象を拡げたいと思います。

「文学作品を読む」ことは、「文学を通して身につけた思考法で考えること」ことにつながっていて、そこから一人ひとりの主体的な思考や表現の実践が始まるはずです。読むことや調べること、議論することの一つひとつをおろそかにしない、意欲的かつ謙虚な学生諸君の参加を待っています。

[授業内容]

〈2年後期〉1910～20年代の短編小説の精読。1910～20年代は、明治期の作家たちがそれぞれの活動を継続する一方で、次世代の作家たち（谷崎潤一郎、志賀直哉、芥川龍之介、横光利一など）が、新しい形式・文体、内容の作品を携えて次々と登場・活躍してくる時代です。それらの作家たちの作品を読解する過程を通して、文学作品を読み、それについて書いていくための基礎的な理論や技術を身につけてもらいます。

〈3年〉中・長編小説の精読。2年次に修得した理論や方法を応用し、また文化研究的な分析も交えながら中・長編小説の読解をおこない、テキストへの多様なアプローチの方法を学修します。テキストは、2年次に浮かび上がってきた主題や履修者の志向などを考慮して選定する予定で、現代小説も積極的に取り入れていきます。夏合宿は例年、いわゆる文学散歩を中心にした内容で実施しています（2018年は東京、2019年は京都を歩きました）。

〈4年〉前期は3年後期からの学修の継続と、各自が定めた卒業研究・卒業制作のテーマに合わせた内容の演習を行います。後期は各自のテーマに即した演習と指導を中心とした授業を行います。

[自己紹介]

専攻は日本近代文学。明治30年代におけるリアリズムの表現・文体の生成過程やその背景を中心に研究をしてきました。継続的に取り組んでいるのは、およそ100年前の青年たちの「書くこと」をめぐる社会的・歴史的状況についてです。生まれながらの個性や言論の自由などが自明視されていなかった時代に、「書くこと」とはどのような営みだったのでしょうか。誰もが書き手になれる現代との隔たりはどのくらいのものでしょうか。私たちのいまを照らし返す多くのことが見えてくるのではないかと考えています。

プロフィール欄にも書いたように、私はこれまで、いろいろな学びの場で、多種多様な人々との接触を経験してきて、そのいずれもがそのときどきの自分にとって大きな栄養になったという自覚があります。ゼミという場はとりわけ重要な場でした。異なる考えがぶつかり合ったり、相互に認め合ったりする中で、自分の考えも他人の考えも深まってゆく、また、そのために必要な言葉や表現を手探りでつきとめてゆく——そんなことを実感・実践できるのがゼミという場だと考えます。しっかりとした目的意識と将来の自己像とを胸に抱いて臨んでください。社会に出るまでの2年半で得られるものは多いと思いますし、それが卒業後の（思考したり、発言したりする）あなたの基盤になるはずです。

[定員を超過した場合の選考方法]

調査用紙の記載内容と提出してもらう課題（1,000字程度のブックレビューを予定）とによって総合的に判断します。

[その他、受講上の注意点など]

文庫本を中心にほぼ毎月数冊ずつ本を買って読むことになるので、そのつもりでいてください。

【プロフィール】

1966 年愛知県生まれ。大阪教育大学大学院国語教育専攻修了。

小学校教員を経て 1992 年から財団法人大阪国際児童文学館(現・大阪国際児童文学振興財団)に勤務し、児童文学の調査と研究に従事。児童文学館はそののち東大阪市に移転してしまっただが、当時は大阪北部の万博記念公園内にあった。かの有名な「太陽の塔」(岡本太郎作)の背中を見ながらの 3 年間は、子どもから大人まで(夏休みの宿題の相談から、研究者やマスコミの調査依頼まで!)さまざまな人との出会いを通して児童文学の裾野の広さを実感できた、多忙ながらも得がたい期間だった。学生時代からこの文学館在職中までに得た数多くの縁が、現在も仕事のエネルギー源になっている。

1995 年には大阪を離れてふたたび愛知へ。愛知淑徳短期大学国文学科に勤務し、その後、文化創造学部、メディアプロデュース学部を経て現職。専攻は児童文学・児童文化。共著に『子どもの文化を学ぶ人のために』(世界思想社)、『はじめて学ぶ日本児童文学史』『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ』(ともにミネルヴァ書房)、『児童文学研究、そして、その先へ』(久山社)、『子どもの本 100 問 100 答』(創元社)、『明日の平和をさがす本—戦争と平和を考える 絵本から YA まで 300』(岩崎書店)などがある。

【ゼミのコンセプト(演習の目標、学生に期待すること等)】

すぐれた児童文学や絵本の作り手が育つことを第一の目標とします。作家として活躍できる書き手が育てばもちろん嬉しいことですが、身近な子どもに向けて物語を語ったり、描いたりできるセンスや力量も立派な才能です。双方の立場でよい作品の送り(贈り)手になることを目指します。第二の目標は、児童文学や絵本の読み手が育つことです。児童文学の場合、子ども読者と作品をつなぐ媒介者としての大人の存在はきわめて重要です。作品講読や実作を通して、自分なりの児童文学観や絵本観を育んでいってほしいと思います。第三の目標は、子どもという存在を契機として、過去を振り返ったり未来を展望したりすることです。子ども時代の体験を思い出したり、作品に描かれた子どもを読み解いたりすることを通して、子ども期の意義について考えるとともに、自分の「これまで」や「これから」、さらには社会の望ましいあり方を考える機会になればと願っています。大学時代は子どもでも大人でもない中途半端な時期です。そうした宙ぶらりんな時だからこそ書ける作品や、感銘を受ける作品があるはず。ゼミの場で一人ひとりがそうした作品と出会い、仲間と分かち合うことができれば何よりです。

3 年前期以降はみなさんが書いたものを相互批評することがゼミの中心になります。授業では書き手として自らの作品世界を創造する力とともに、自他の作品を批評したり、ジャンルや歴史のなかに位置づけたりする俯瞰的な視点を養うことも重視していきます。

[授業内容]

2 年後期は日本児童文学の代表的な作品を読みます。個々の作品を丁寧に読みあいながら、児童文学史の流れを把握すると同時に、教育や文学、あるいは文化のなかの「子どもの文学」の位置と変容を考察します。3 年前期からは児童文学(絵本を含む)の創作と研究・評論に取り組みます。子どもの文学は、従来、大人の文学とは異なる特性を持つものとされてきました。多メディア化が進み、子どもと大人の境界が問われる現在、私達は「なぜ」「何を」子どもに向けて書くことができるのでしょうか。作品を読み、書き、批評するプロセスを通して、子どもの文学の面白さや可能性を考えていきます。前期には短編童話の公募に全員でチャレンジしたいと考えています。また夏休みにはゼミ合宿を実施し、児童文学関連施設の見学や創作の合評会も行う予定です。

4 年生の卒業論文・卒業制作では、児童文学の研究や創作とならんで絵本制作も受け入れます。ただし、授業では言葉(文章)の指導が中心になりますから、絵の勉強は自分で積極的に進めてください。もちろんリクエストがあれば情報の提供や紹介は惜しみません。

[自己紹介]

児童文学・児童文化のなかでも日本児童文学史が専門で、論文を書く際には明治から昭和戦前期までの児童雑誌や児童出版文化を主な研究対象としています。子どものころ、祖父が所蔵していた昭和初期の円本に出会って以来の古本好きで、いまま古書店や古本まつりを訪れたり、かび臭い文献のページを繰ったりしている時がいちばん幸せです。

児童文学は研究の歴史がまだ浅いので、どうしても守備範囲を広げざるを得ないところがあります。そんな事情も手伝って、出版・雑誌研究のほか、仲間と一緒に幼年童話や絵本のブックリストを編集したり、絵本史の論文を書いたりすることも。ここ数年は昭和初期の製菓会社(森永、明治、グリコなど)のおまけや子ども向けキャンペーン、またそれらに携わった人々を手がかりとした児童文化史の再検証に取り組んでいます。

創作指導には大学に勤務してから携わるようになりました。時には公募の審査員を務めたりすることもあります。学部時代の恩師は児童文学の作家でしたが、私自身に創作の経験はありません。批評する立場、もっと言ってしまえばわがままな一読者の立場から、創作志望者の皆さんをサポートできたらと考えています。もちろん、研究志望者も大歓迎。児童文学研究は、未開拓の作品・作家の宝の山です。

[定員を超過した場合の選考方法]

調査用紙と課題(提示したテーマに沿って、400 字×5~10 枚程度の短編童話を提出)

[その他、受講上の注意点など]

特にありません。強いていえばゼミ決定後でも良いので「児童文学」や「児童文化論」を受講してくれると、ゼミでのディスカッションや作品制作に何らかの形で役立つはず。

[プロフィール]

1965年愛知県生まれ。高校時代からさまざまな社会運動にコミットし、高校卒業時に『オイこら！学校』（教育史料出版会 1984）を出版する。その後、東京の私大を数日で中退後、週刊誌記者となる。以来、東京を拠点にしてノンフィクションライターとして取材・執筆活動が続け、テレビやラジオ、インターネット放送でもコーディネーターやコメンテーターを長年にわたってつとめていた経験もある。扱うテーマはさまざまな社会問題から人物もの、グルメまで幅広く活動しています。

単著や共著書、対談本等は、『先生、もう生きていけない！』（三一書房 1988）、『ルポルタージュこれが初任者研修の実態だ！』（あゆみ出版 あゆみ出版編集部と共著 1988）、『生徒人権手帳』（三一書房 平野祐二氏らと共著 1990）、『少年の街』（教育史料出版会 1992）、『18歳未満『健全育成』計画——淫行条例と東京都「買春」処罰規定を制定した人々の野望』（現代人文社 1997）、『学校の先生には視えないこと』（ジャパンマシニスト社 1998）、『学校の日常生活を生きぬけ——死なず殺さず殺されず』（教育史料出版会 宮台真司氏との対話 1998）、『性の自己決定原論』（紀伊国屋書店 宮台真司氏らとの共著 1998）、『暴力の学校 倒錯の街——福岡・近畿大附属女子高校殺人事件』（雲母書房 1998）、『美しき少年の理由なき自殺』（メディアファクトリー 宮台真司氏と共著 1999）、『17歳の殺人者』（ワニブックス 2000／『少年の街』を改訂、新原稿を追加して新編集）、『リアル国家論』（教育史料出版会 宮台真司氏他と共著 2000）、『人を殺してみたかった——愛知県豊川市主婦殺人事件』（双葉社 2001）、『殺人を予告した少年の日記——愛知県西尾市「ストーカー」殺人事件』（ワニブックス 2001）、『脱社会化』と少年犯罪』（創出版 宮台真司氏との対話 2001）、『少年の「罪と罰」論』（春秋社 宮崎哲弥氏との対話 2001）、『孤立を恐れるな！——もう一つの「一七歳」論』（批評社 高岡健氏らとの共著 2001）、『教師失格』（筑摩書房 2001）、『コリアン・サッカー・ブルース』（アートン 2002）、『開国マーチ』（実業之日本社 荒木経惟氏との共著 2002）、『17歳の殺人者』（朝日文庫版 2002）、『少年に奪われた人生』（朝日新聞社 2002）、『暴力の学校 倒錯の街』（朝日文庫版 2002）、『いつの日にかきっと』（アートン 2002）、『学校が自由になる日』（雲母書房 宮台真司氏・内藤朝雄氏と共著 2002）、『人を殺してみたかった』（双葉文庫版 2003）、『500万で家をつくろうと思った。』（アートン 鈴木隆之氏との共著 2003）、『わが子を被害者にも加害者にもしない』（徳間書店 2003）、『この世からきれいに消えたい。』（朝日文庫版 宮台真司氏と共著 『美しき少年の理由なき自殺』の文庫化 2003）、『こころのブレーキがきかない』（NHKスペシャル「少年犯罪」プロジェクト＋藤井誠二 NHK出版 2004）、『文筆生活の現場』（中公新書ラクレ 石井政之氏他との共著 2004）、『風光の済州島—漂流』（アートン 荒木経惟氏との共著 2004）、漫画『アクション』連載『17歳。』（双葉社 藤井は原作担当 第1巻～4巻 2005）、『少年犯罪被害者遺族』（中央公論新社中公新書ラクレ 2006）、『こころ「真」論』（ウェイツ 高岡健氏・宮台真司氏らとの共著 2006）、『殺された側の論理 犯罪被害者が望む「罰」と「権利」』（講談社 2007）、『学校は死に場所じゃない』（ブックマン社 2007）、『少年をいかに罰するか』（講談社α文庫 宮崎哲弥＋藤井誠二『少年の罪と罰論』の文庫化 2007）、『「悪いこと」したらどうなるの』（理論社 よりみちパンセ 2008）、『重罰化は悪いことなのか』（双風舎 芹沢一也氏、宮台真司氏、郷田マモラ氏他との対話 2008）、『大学生からの取材学』（講談社 2009）、『罪と罰』（イーストプレス 宮崎哲弥氏、本村洋氏との対話 2009）、『死刑のある国ニッポン』（金曜日森達也氏との対話 2009）、『アフター・ザ・クライム 犯罪被害者遺族が語る「事件後」のリアル』（講談社 2011）、『三つ星人生ホルモン』（双葉社 2011）、『文庫版・殺された側の論理』（講談社α文庫 2011）、『権力にダマされないための事件ニュースの見方』（河出書房新社 大谷昭宏氏との対話 2011）、『光市母子殺害事件』（『罪と罰』の文庫化・ぎんが堂文庫 2012）、『「壁」を越えていく力』（講談社 2013）、『「オネエ」はなぜメディアでモテるのか』（春秋社 中村うさぎ、伏見憲明氏らとの対話・2013）、『体罰はなぜなくなるならないのか』（幻冬舎新書 2013）、『40歳からの人生を変える 心の荷物を手放す技術』（牧野出版 精神科医・名越康文氏との対話 2013）、『「少年A」被害者遺族の慟哭』（小学館新書・2015）、『沖縄 オトナの社会見学R18』（亜紀書房 仲村清司氏、普久原朝充氏との共著・2016）、『豚の王国 沖縄で楽しむ肉グルメ』（双葉社 仲村清司氏、普久原朝充氏との共著）、『僕たちはなぜ取材するのか 極私的取材の世界』（皓星社 2017）、『黙秘の壁・名古屋漫画喫茶従業員はなぜ死んだのか』（潮出版社 2018）、『沖縄アンダーグラウンド——沖縄の売春街はなぜ消えたのか』（講談社）等 50冊以上。

[ゼミのコンセプト(演習の目標、学生に期待すること等)]

ノンフィクションとは簡単にいうと私たちの社会に実在するすべての事象を描いたもの、記録したものの、表現したものと考えてください。着想(テーマや素材選び等)から取材や調査、執筆までをひとりでおこなうことを基本とします。いまの社会の「表現」といわれる分野において「取材」という行為は必要不可欠なものだと思っています。事実は小説よりも奇なりといいますが、人間が実際に生み出した営為、あるいは経験や体験は、しばしば人間の想像を超えたものになります。そこに興味を持ち、向き合い、考え抜いてほしいと思っています。人に会い、資料にあたり、現場に身を置く等、「取材」の方法はさまざまだけれど、取材の善し悪しが、表現する者の発想に影響を与えるし、表現そのものも関わってきます。人がアタマの中だけで考えることよりも、私たちが生きている現実社会でじっさいに起きていることのほうがはるか先を行っているからです。「取材」という、見知らぬ他者とのコミュニケーションは、自分自身を未知のものと出会わせるためのツールとして、あらゆるメディア表現の基本を成している基本だと思っています。講義は、将来はメディア(分野としてはノンフィクションやドキュメンタリーを中心に)ではたらくことに興味を持つ人に有益になるよう構成したいと思っていますが、ゼミ参加者の将来の希望をヒアリングしながら、「取材」というコミュニケーションが当人にどう役立つかを考えながら、議論や教材選びを進めていきたいと思っています。昨今では「メディア」だけでなく、あらゆる仕事に「取材」という行為は欠かせませんから、ノンフィクションやドキュメンタリーの取材手法や取材コミュニケーションスキルを知ることが広い意味で「他者から何かを聞き、また別の他者(社会や共同体)に伝える」というあらゆる行為に役立つと考えます。インターネットだけに頼らず、街に出て、人に会う。資料を調べる。取材や調査、インタビューなどを通じて「他者」や「社会」の地肌に自身が生で触れることを大切に、優秀な作品はウェブ等で発表して、不特定多数の人々からの批評を得たいと思っています。ノンフィクションを読んだり、映像を観るなどして、それらがどうつくられ、社会に何を問うているのかを話し合っていきたいと思います。

[授業内容]

講師(藤井)は現役のノンフィクションライターなので、これまでの経験を、受講生の希望(将来的にどういったかたちでメディアに関わっていきたいかなど)に役立つように指導していきます。藤井が愛知淑徳大学等の授業内容を単行本化した『大学生からの取材学』(講談社 2009)と、『「壁」を越えていく力』(講談社 2013)、『路上の熱量』(風媒社 2019)という人物ルポばかり集めた藤井の単行本は教科書として必読してもらいます。藤井が単行本や雑誌等に発表した作品や、時代や世代を問わず、さまざまな分野のノンフィクション作品に少しでも多く接することを旨とします。ドキュメンタリー映像作品も観てもらいます。その上で取材手法や表現方法、つくられた背景や時代などを議論しながら、自分で題材を決め、実際に取材活動をおこない、一定の枚数以上(400字×50枚)の作品にまとめあげていく(書く)ことを一応の目標とします。(「大学生からの取材学」は、徳間書店カレッジ文庫版が2015.12に出ていますから、そちらを購入してください。また「壁を越えていく力」は現在、絶版中ですので、文庫化をお待ちください。あるいは古本をさがしてください)

[自己紹介]

ぼくはノンフィクションを書くために特別な勉強をしたことはなく、二十歳ぐらいからさまざまな「現場」に飛び出して、直に身をさらして、本や資料を読みあさり、いわば独学で仕事をしてきました。現場でいろいろな失敗を積み重ね、そこで邂逅してきた人々や事実(現実)こそが自分を耕し、鍛えてくれたのだと思っています。もちろん、それは今も続いています。そういった体験をゼミ生と共有することによって

、関心のあるテーマを発見し、それを自らが取材することのおもしろさ、それを「伝える」こと「記録」することの意義を考えてみたいです。大学にはジャーナリズムの歴史を専門的に学ぶところもあれば、本ゼミと同様に「取材して(活字や映像で)表現する」というコースをもうけるところも増えてきましたが、自身の「身体」で感受することを軸にしたいです。

[定員を超過した場合の選考方法]

調査用紙とレポート(このゼミを受講したい動機等について書いてもらいます。)

[その他、受講上の注意点など]

特にありませんが、ぼくは専任教員ではなく、日々のノンフィクションライターとしての取材活動とゼミが重なることが頻繁にあるので、休講通知をこまめにチェックしてください。

[プロフィール]

1963年、愛知県名古屋市生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。卒業後は、調査会社記者、雑誌編集者、フリー編集者／ライターを経て、1995年に名古屋に戻り、出版社・風媒社に勤務。現在、同社編集長。愛知淑徳大学では、文化創造学部、メディアプロデュース学部で出版・編集に関する講座を担当。

[ゼミのコンセプト(演習の目標、学生に期待すること等)]

編集者は文章を読むのが仕事。ただ漠然と読むのではなく、つねにいくつかの目的をもって原稿や雑誌・書籍を読んでいます。しかし文章を読むだけでは、企画を発想するアイエアは広がりません。ネットの大海を涉猟するのも限界があります。編集者にもっとも必要であり大切なのは「現場」です。事件・事故・運動・ムーブメント……、何かが、そこで、たった今起きている、その場所に居合わせることが企画の広がりにつながります。ですから好奇心のアンテナを四方に立て、関心を抱いたら超深度までソナー探査し、出かけていって直接出会うことが大切な経験となります。

また、出版にはジャーナリズムとしての役割があります。言論・表現の自由のために、時には論争をしたり、社会への提言を発信することもあります。日本でも少しずつジャーナリズム教育が盛んになっていますが、出版社や編集者を目指す人たちには、社会への批評眼がなくてはなりません。それを養うためには、日常的に様々なメディアにアクセスすることが不可欠です。新聞、雑誌、放送、ウェブメディア等に複数目を通し、世の中に流通している意見や見解の多様さを受けとめなければなりません。

本ゼミは、出版に関心があり、実際の編集作業を経験したい人とともに雑誌作りの「場」をつくります。活字メディアの立案、コンセプトづくりから、実際の編集作業まで、一連の流れを経験することで、基礎的なスキルの習得と、出版の社会的意義と表現のあり方を自主的に学びます。また、将来、出版関連の仕事を志す者への情報提供の機会ともしたいと思います。

[授業内容]

2年生後期は、おもに記事企画立案や文章力の基礎を鍛え、同時に取材や調査の方法を学びます。3年生は、雑誌のコンセプトを決定し、実際に取材を行って記事の執筆に着手。ゼミで発行する雑誌『TOI BOX』を制作・刊行します。4年生では各自が編集者という立場からボリュームのある企画を手がけ、1冊の本(『TOI BOX extra』)に仕立てます。一連の編集作業を通じ、色彩、グラフィックデザイン、デジタルデータ、著作権、印刷など、出版の現場で必要不可欠な知識の基礎を学んでいきます。

〔自己紹介〕

大学生の頃は、東京でマスコミ関係のアルバイトをし、卒業してからは、出版社数社に在籍、一貫して雑誌の編集に携わってきました。1995年に名古屋に戻り、おもに書籍を刊行する出版社・風媒社に入社。98年から編集長になりました。東京と名古屋で出版を経験しているわけですが、東京（首都圏）以外はすべて蚊帳の外といえるくらい、出版は極端に中央集中型の業界です。名古屋にもいくつか出版社はありますが、いわゆる大手は存在しません。しかし、それは文化が貧しいことを意味しているわけではありません。むしろ、出版に限らず文化の東京一極主義はいま、深刻なリソースの枯渇を迎えた閉塞状態にあると言えます。私たちの生きるこの地域から、日本全国、世界各地の人々に向けて、どのように視界を広げ、何を突きつけるかが、地方で出版を行うこれからの意味だと思います。やるべきことは、たくさんあります。

〔定員を超過した場合の選考方法〕

調査用紙の記述内容から判断します。それでも決まらなければレポート（メディア、とくに出版についての800字エッセイ）を書いてもらいます。

〔その他、受講上の注意点など〕

ゼミに入ったら新聞の出版広告、書評欄は必読。毎日必ずチェックしてください。また、「エディターシップa」「エディターシップb」「エディターシップc」、「出版文化論a」「出版文化論b」などの関連する講義はできるだけ履修することをおすすめします。

〔プロフィール〕

愛知県岡崎市生まれ。小中学生の頃は歴史の本を読んだり、神社・寺院・古墳といった有形文化財を見て回るのが好きでした。週末には自分で旅程を組んで文化財めぐりをしていました。マンガ・小説・詩など創作系の本を自分から買うようになったのは中3からでした。マンガでは永井豪・萩尾望都・大島弓子・岡崎京子、小説では安部公房・大江健三郎、詩では萩原朔太郎・鈴木志郎康をよく読みました。大学・大学院時代は中国哲学研究室に所属し、理屈っぽい漢文をたくさん読みました。それと並行して劇団にも所属し、名古屋のほかには東京・大阪でも公演をしていました。淑徳の教員としては短大国文学科・短大文芸学科・文化創造学部表現文化専攻・メディアプロデュース学部クリエイティブライティングコース・メディアプロデュース学部創造表現専修を経て創造表現学部創作表現専攻に至りました。この間に、自分の脚本・演出で公演を打ったり、能の鑑賞と研究に入れ込んだりして現在に至ります。

〔ゼミのコンセプト(演習の目標、学生に期待すること等)〕

創作はいったい何のためにあるのでしょうか？ 空想の世界に遊ぶことで、現実から束の間解放されるため？ それもなくはないでしょうが、決してそれだけではありません。

松尾芭蕉の『野ざらし紀行』に「猿を聞く人捨て子に秋の風いかに」という字余りの句があります。「秋の猿の哀愁ある鳴き声を題材に詩歌を作っている風流人たちよ。目の前で捨て子が冷たい秋風にさらされている。さあ、どうする？」という意味です。現実の問題に対して文学に何の意味があるか、と問いかけているわけです。

これとほぼ同じ事を 20 世紀を代表する哲学者で文学者のサルトルも言っていて、同時代のリカルドゥという批評家が、悲惨な現実に関心し、何らかの行動を起こすような想像力と判断力を養うのに文学は有効だという意味のことを答えています。これはこれでもっともな気もしますが、現実に対する認識や感受性を高めるのにはドキュメンタリーで十分ではないか、必ずしも創作によらなくてもよいのではないか、とも思えます。

私も自分が演劇の公演を行う時には、自分の創作するものが観客にとって、ひいては社会にとってどんな意味を持ち得るのかと考えます。それは、ちょっと考えたくらいで簡単に答えの見つかる問いではありません。しかしながら、わかっていると自覚すること、そして、わからなくても考え続けることは、絶対に必要です。

近年、SNS の普及により、創作について無責任と言うほかない言説が氾濫しています。創作の社会的責任を問われる事態に対して、「表現の自由」を振りかざして黙殺しようとしたり、「現実と虚構は別物だ」と開き直ったり——。しかし、いかなる現実とも没交渉な虚構など存在しません。虚構はかなりの部分、現実の規定されているし、現実に影響を与え

もするのです。

そもそも自由とは、相互尊重を基盤にしてしか成り立たないものです。自由は「好き放題やるだけやって責任を問われない特権」ではありません。だからこそ、表現を批判する側にも「言論の自由」が保証されているのです。もしも表現が何かを踏みにじってしまうのであれば、当然その責任が問われなければなりません。

言うまでもないことですが、表現という行為は、表現する者と、それを受け取る者と、その両者を包み込む社会的関係という三つの要素があって成り立つものです。表現する者は、それを受け取る者に対しても、社会的関係に対しても、責任を負わなければならないのです。

この専攻で表現を学ぶ皆さんには、ぜひとも表現の社会性について自覚的であってほしいと思います。特に私のゼミでは、表現と社会の関わりについて広い視野から学び、それを創作に活かせるようにしたいと思っています。

[授業内容]

社会性の強いテーマに沿って、領域横断的に作品を講読または鑑賞します。扱う作品のジャンルは演劇を中心としつつ、時として映画、小説、マンガに及ぶこともあるでしょう。

卒業課題は上演時間が60分以上となる戯曲の創作を原則とします。(ゼミの活動として上演することは想定していません。)ただし、授業内容と密接に関係するものであれば、論文の執筆(原稿用紙換算50枚以上)や、戯曲以外の創作についてもなるべく柔軟に対応するつもりです。ただし、ゲームのシナリオのようにストーリーが複雑に分岐するものは認められません。

[定員を超過した場合の選考方法]

調査用紙の記載を熟読して選考するつもりですが、それだけで決定できなければ、レポートも書いてもらうことにします。

[その他、受講上の注意点など]

刈馬カオス先生のゼミと合わせて履修することを強くお勧めします。

また、ゼミ以外にも、演劇に関する授業をなるべくたくさん受講してください。

私のゼミに所属することが決定した方には夏期休暇中に課題をやって頂きます。この課題は2年後期ゼミ科目「演習Ⅰ」の授業内容の前提となるものですので、課題を提出することなく「演習Ⅰ」を受講することは認められません。課題の指示を伝達しますので、所属決定後(副ゼミでの所属を希望する方は主ゼミ決定後)ただちに t-sumida@fj9.so-net.ne.jp に連絡してください。

刈馬カオスゼミ

副ゼミ…可

〔プロフィール〕

1977年名古屋市生まれ。近畿大学文芸学部芸術学科演劇・芸能専攻卒業。

16歳より演劇活動を始め、20歳より劇作・演出を手がける。劇団「青年団」での俳優活動を経て、24歳で名古屋小劇場演劇のメッカ「セツ寺共同スタジオ」30周年記念公演の作・演出を担当したのを機に、劇作に専念。シビアなシチュエーションでのヒリヒリするような緊張感ある会話を得意とする。

『クラッシュ・ワルツ』で第19回劇作家協会新人戯曲賞・名古屋市民芸術祭2015芸術祭賞(大賞)。『誰も死なない』で名古屋市民芸術祭2014特別賞・第3回せんだい短編戯曲賞最終候補。『異邦人の庭』で名古屋市民芸術祭2019特別賞。『モンスターとしての私』で第18回テアトロ新人戯曲賞佳作。『マイ・フェイバリット・バ—————ジン』で第8回AAF戯曲賞最終候補。平成27年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞。

テレビ・ラジオ・他団体への作品提供、人形劇・大道芸人ショウの演出、ワークショップ講師、高校演劇大会や若手劇団フェスティバルの審査員など多数。

2015年より名古屋市文化振興事業団の芸術文化活動アドバイザーに就任。

〔授業内容とゼミのコンセプト（演習の目標、学生に期待すること等）〕

演劇系ゼミの中で「戯曲(演劇の脚本)創作」を主眼に進めていきます。戯曲執筆経験はあまり重要視しません。なぜなら、演劇というジャンルでは時として、経験よりも意欲の強さが勝ることがあるからです。ただし、「どうせだったら面白いモノを作ろう」という執着がどれだけ強いかが重要です。

まずは、現代演劇における重要な戯曲・上演を紹介しつつ、課題の執筆に取り組み、戯曲の構造・仕組み等の基本を学んでもらいます。そして書くだけでなく、既存の戯曲を解説することもおこないます。何を面白いと思ったのか、何をつまらないと思ったのかを言語化することは、創作者を鍛える大事な行程だからです。また、実際に劇場へ足を運んでの演劇鑑賞もおこないます。これらを何度も何度も繰り返すことで演劇的基礎力を高めていき、徐々に卒業制作となる戯曲創作にシフトしていきます。講師の指定した作品だけでなく、自ら積極的に様々な演劇作品に触れるようにしてください。

戯曲というのは、上演されることを前提とした文学という特殊な性質を持っています。書かれた言葉は、俳優によって発せられて初めて完成するとも言えるのです。だからこそ、書くだけでなく演出・演技などについても学びます。このゼミでの最大の目的は、戯曲創作を通じて現代演劇全般について理解を深め、劇作にとどまらず様々な演劇力を身につけることです。

どうせだったら面白いゼミにしましょう。

〔自己紹介〕

私の本職は、劇作家・演出家です。現役創作者として自劇団で年2本程度の公演をうつほか、他団体からのオファーを受けたり、様々な演劇講座で指導もおこなっています。ちなみにこの名前は本名ではありません。ペンネームです。

〔定員を超過した場合の選考方法〕

調査用紙を熟読して選考します。それでも決まらなければ、課題を提出してもらいます。

〔その他、受講上の注意点など〕

角田達朗先のゼミと合わせて履修することを強くお勧めします。また、ゼミ以外にも、演劇に関する授業をなるべくたくさん受講してください。特に刈馬が担当する『戯曲a』での内容を踏まえて進めることがあるので、2年後期中までに履修することを必須とさせていただきます。

3年時夏期休暇中に合宿をおこなう予定のほか、全員で同じ演劇公演を観に行く場合があります。また卒業制作として短編戯曲を執筆の上、卒業公演をおこなう予定です。その際の稽古は授業時間外にもする場合があります。

[プロフィール]

1980 年岐阜県生まれ。早稲田大学第一文学部演劇映像専修卒業。東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。博士課程満期退学。愛知淑徳大学非常勤講師、メディアプロデュース学部助教を経て、現職。

中学時代に映画に目覚め、上記私立大学で、「好き」が高じて映画の専修へ進み、大学時代は暇さえあれば VHS を貪り見て、映画館をハシゴする日々。大学院では学部時代とは違った環境に身を置いて研究生活を始めたが、孤独と挫折に苛まれる日々。そんな中、戦後の日本映画界でも際立ってムラツクの強い鬼才、川島雄三監督に魅了され、恋するあまり、青森は下北半島に川島の墓参りにまで出かけていた。書き上げた修士論文も川島雄三論という名の川島へのラブレター。その後、この研究が転じて戦後日本の商業映画、いわゆる B 級映画の研究を続け、現在は、「映画と戦争記憶と風俗」といったキーワードで、これまで見過ごされてきた新たな視点から映画史を編み直そうと奮闘中。孤独な大学院生活の一方、東京は青山のシナリオセンターにてシナリオライター養成講座に通い、バラエティーに富む職種のゼミ仲間と映画・シナリオ談義に明け暮れたのも、現在の自分の糧となっている。

[ゼミのコンセプト(演習の目標、学生に期待すること等)]

*映画を通じて世界を眺めてみよう
映画の読み手、そして書き手になろう*

「見る」という行為は、ともすると受け身になりがちです。「思考」を置き去りにしても、ただ「見る」ということなら誰にでもできてしまいます。しかしながら、映像作品の背後には数多の作り手があり、映像はそれらが絡み合っただけで無数のメッセージを発しています。そうしたメッセージを「読み取る」ことにこそ、作品受容の醍醐味があると考えています。

ゼミではまず、あらゆる映像作品を見て分析することにより、映像を「読む」力をつけ、映像の特質をつかんでもらいます。そして、今ある作品がどのような背景で成立したのか、社会的・歴史的な文脈にも目を配り、作品の歴史的意義を考察します。これらを踏まえたうえで、映像シナリオの書き手、映画批評の書き手としての力を実践的に身に付けていきます。

ゼミ生には徹底的に読むこと、見ること、書くことに取り組んでいただきます。力をつけるためには、相当数をこなす、膨大な時間を費やすことが必要です。映画ってただ見ていればいいからラク、シナリオって小説に比べて書きやすそう、何やりたいか分からないのでとりあえず、などという安易で誤った認識をお持ちの方は受講しないでください。プレゼミで、指定された映画作品をほとんど観てこなかった方も、このゼミに向いているとは言えません。「三度の飯より映画が好き」という方こそ、お待ちしております。

[授業内容]

2 年後期は文学と映像表現の比較、映像分析等を通じて、それぞれが映像に対して研究、批評、シナリオ執筆のうちどのようなアプローチをしていくのか、検討します。

3 年前期は映画芸術やシナリオ創作に関するテキストを熟読します。少々難解で抽象的

なテキストを読みこなすなかで、映像というものを専門的な視点で捉えられるよう訓練しましょう。

夏休みにはゼミ生の希望によりゼミ合宿を実施します。映画関連施設を見学したり、前期の成果を後期へと繋げる講評会を行ったりします。

3 年後期以降は映像シナリオの創作と映像分析を中心に、実践的な力を身に付けていきます。

4 年次には、シナリオ創作、映画研究いずれかのフィールドで卒業プロジェクトに取り組みます。創作・研究双方の立場のゼミ生が、互いにより刺激を与え合いながら、大学時代の集大成を生み出せるよう、サポートします。

ゼミでのプログラムとは別に、ゼミ生には様々な映画上映会を企画・開催していただきたいと思います。お客さんを集めるために試行錯誤することもまた、大いに勉強になります。

【自己紹介】

日本映画史、とりわけ戦後日本の喜劇映画の研究を専門としています。専門に関わらず、国内外のあらゆる映画を愛しています。今は授業では日本映画やハリウッド映画を取り上げることがほとんどですが、皆さんにはぜひ、学生のうちにあらゆる文化圏、ジャンルの映画に触れてほしいと思っています。私は大学時代に香港映画にハマリ、東南アジアや中東の映画にも目を見張りました。名画座に通って、古い日本映画も数々見ました。各地で開催される映画祭に参加して、朝から晩まで何本もの映画を見続けたこともあります。いずれも映画が発するただならぬ熱量に圧倒され、自分が信じてきた「物語」の常識を突き崩される体験でした。

近頃では「映画館をハシゴ」なんて夢のまた夢になってしまいましたが、それでも魅力を感じるのは活きた人間が描かれた作品ばかりです。活きた人間を描こうとすると、美しい世界や夢のような理想郷とは程遠い作品ができ上がることもあります。醜さも滑稽さもひっくるめて、それでも人間は面白いのだ、マイッタカ！と言い切れる作品が大好きです。人間のパワーがみなぎっている映画はたいてい、シナリオ力の高い作品だと信じています。みなさんにも、そんな作品を生み出していただきたいと思います。

【定員を超過した場合の選考方法】

課題を提出：提示したテーマにそって、2000 字程度の映画評論を書く。

【その他、受講上の注意点など】

「映画論」や「クリエイティブライティング e」を受講しておかれると、ゼミでのディスカッションや創作にスムーズに入っていけるとと思います。前者では映画分析の基礎、後者ではシナリオ執筆の基礎を学べます。

吉田朝香ゼミ

副ゼミ…不可

【プロフィール】

愛知県出身、在住。トライデントデザイン専門学校ビジュアルイラスト学科、マンガ専攻卒業。

14歳の頃より同人誌即売会に参加するなどの執筆活動を始め、専門学校の卒業制作を投稿したことで一迅社にて担当がつく。8年ほど一迅社で読み切りを中心に描き続け、Webでの短期連載などを執筆。

その間も同人活動を始め、時に商業アンソロジーに参加し、母校のトライデントデザイン専門学校で非常勤講師として勤めたりなどの活動をしたが、一身上の都合で転身し一般企業に派遣社員として勤め始め現在に至る。

他に、東海地方情報誌月刊 KeLLy で女性のお仕事取材マンガの構成・ネームを担当。(志水先生との合作)

【ゼミのコンセプト(演習の目標、学生に期待すること等)】

「絵を描く仕事がしたい」と一口に言っても今や様々な仕事がある時代です。それは漫画家であったりイラストレーターであったりゲームの原画家であったりアニメーターであったり…そのどれにも共通して求められるのは作品の完成度であると思います。妥協せず完成度の高い作品を描き切ることは、今後の人生で必ず役立つものです。

プロを目指す方はもちろんのこと、全く違う仕事をするようになったとしてもその経験、作品は絶対に自分を裏切りません。誰に見せても「お！すごいね！」と一目置かれるような作品を作る手助けができればいいなと思います。

【授業内容】

私自身モノクロはアナログ、カラーはデジタルな人間なのでどちらかにこだわることはありません。とにかく完成度にこだわって、きちんと最後まで描き上げることを第一目標に進めていきたいと考えています。

漫画とイラストを中心に制作していきます。漫画はどうしても時間がかかってしまうので、8～16 ページ程度のもので進めてもらいます。イラストは背景必須、一枚は必ず背景を入れて描いてください。

出来上がった作品は何かしらの場で発表してもらいます。編集部への投稿でも Twitter でも pixiv でも何でも構いません。第三者の意見を聞く機会は貴重なので、ぜひ一緒にチャレンジしていきましょう。

[自己紹介]

物心ついた頃から絵を描く仕事を夢見て絵ばかり描いている子供ではありましたが、アニメ、ゲーム、映画、海外ドラマ、音楽などいわゆるサブカルと呼ばれるものには多々興味を惹かれます。中学生の頃はひたすらラノベを読み漁っていた時期などもあり、現在はドールハウスやアクセサリーなどのパーツクラフトが好きで、日々物作りのことばかり考えています。

何かを作る、生み出すという行為は本当にワクワクして人生を豊かにしますよね。皆さんにはそういった「創造」することが好きな人達が集まって、お互いに切磋琢磨しながら素敵な作品を生み出してほしいなと思います。

[定員を超過した場合の選考方法]

調査用紙と作品提出(作品は直近で作成したもの。完成作品が好ましい)

[その他受講上の注意点など]

モノクロ・カラー共に作品を最後まで完成させられるだけの道具を用意していただきます。内容に関して特に指定はありません。自分に合った道具を使って下さい。道具のことがよくわからないという方は相談してください。

水彩での着彩など特別な理由がない限りは鉛筆描き不可です。

志水瞳ゼミ

副ゼミ…不可

[プロフィール]

愛知県名古屋市生まれ、三重県在住。漫画家、イラストレーター
16歳で地元即売会やコミックマーケットなどでの同人誌活動を開始。その活動をキッカケに月刊アニメディア（学研）などでイラストの仕事をするようになる。
その間専門学校へ入学。卒業制作で描いた漫画で担当がつき、23歳の時に月刊ウィングス（新書館）で漫画家デビュー。その後一迅社や竹書房、宙出版、KADOKAWAなどで漫画執筆を行う。その他過去に、医療や介護現場で使用するイラストカットを作成したり東海地方情報誌月刊 KeLLy で女性のお仕事取材マンガの作画を担当。

[ゼミのコンセプト（演習の目標、学生に期待する事等）]

漫画の描き方を勉強しようとする今や様々な種類の参考書があり、インターネット上には沢山の参考サイトが存在します。

これら様々な手法はあれど紙とペンさえあれば漫画は描けます。

しかし時代は流れ、本は紙から電子書籍に。漫画家の作業環境もアナログからデジタルへと転換期を迎えています。

出版不況と言われ、近年は紙の漫画雑誌の休刊が相次いますが、それらは全て無くなったわけではなく web へ移行したものも。漫画は紙ではなくデジタルで読む時代が来ています。

更には、インターネットのお陰でどこかに属さずとも個人で世界に作品を発表できるようになりました。クラウドファンディングなどによる出資者と共に作品を作っていく流れも盛んとなってきています。

せっかく作った作品作っただけでは何も始まりません。デジタル化が進む今、広がる選択肢から自分に見合う作品発表の場、共に見つけませんか？

[授業内容]

この授業はデジタルで創作する事を目的としますので、デジタル機器は必須です。

①本体。

オススメは持ち運びがしやすく手軽なタブレット【iPadPro など】やノートパソコン【surface など】です。使用する OS などを考えてチョイスしてください。

※本体の他にスタイラスペン【Apple Pencil など】も必要となります。

※ 絵を描くには容量を必要としますので iPad は iPadPro を推奨します。

②絵を描くためのアプリケーション。

本体だけでは絵は描けません。

オススメはマンガ家やイラストレーター御用達アプリ【clip studio】です。

その他に【メディバンペイント】【ibis paint】や【Procreate】などがあります。

卒業制作で冊子印刷を予定しているので、印刷に耐えるカラー350dpi・モノクロ 600dpiの解像度は必要となります。覚えておいてください。

③ 作品提出に使用する Dropbox(ドロップボックス)のアカウント。

無料の方で良いので自分用のアカウントを事前に作成しておいてください。

作品提出はDropbox を使用してデータのまま提出となります。

講師が使用する本体とアプリは『iPad Pro12.9(2018 モデル・256GB)+Apple Pencil2』の『clip studio』『Procreate』です。

①②に関しては授業開始後も悩んでいる場合相談に乗ります。

使い方解説で使用するアプリは『clip studio』を基準に進めます。

ゼミ初期は全員同じ課題ですが、進むにつれてイラストとマンガに分かれ個々の作品制作へと移っていきます。

ゼミで制作した課題は手元で眠らせず投稿など発信してもらいます。

[定員を超過した場合の選考方法]

調査用紙と作品提出(作品は直近で作成したもの。完成作品が好ましい)

ここではデジタル、アナログは問いません。

[その他受講上の注意点など]

デジタル機器を持っていない人は本体購入の他に制作アプリケーション(clip studio)や絵を描くためのペン(Apple Pencil やWacom スタイラスペン)など初期投資でかなりの金額が掛かる事を念頭に置いておいてください。

ゼミ合宿も予定しています。